

令和6年度

手をつなぐ作品展

第72回 入賞作品集



公益財団法人 千葉県肢体不自由児協会

ご あ い さ つ

「手をつなぐ作品展」作文募集には、多くの方々からご応募をいただき厚く感謝申し上げます。

例年、11月10日から12月10日まで「手足の不自由な子どもを育てる運動」が全国的に繰り広げられます。

公益財団法人千葉県肢体不自由児協会でもこの運動の一環として「愛と友情の絵はがき」「チーバくんクリアファイル」等の募金活動で児童、生徒のみなさまにご協力をいただいております。

また、この運動の事業のひとつとして、千葉県をはじめ、千葉県教育委員会、千葉市教育委員会、毎日新聞社千葉支局の共催で障がいのあるかたたちとの交流や障がいについての理解を深めてもらえるよう作品展を実施しています。

今年は小・中・高・特別支援学校を含め14校、42点の作文の応募がありました。例年、小学生からの応募が少なく、今年も7点の応募ではありましたが、入賞作品に3点が選ばれました。

特に今回の知事賞は審査員全員一致での知事賞決定となりました。知事賞が小学生から選ばれたのは、久しぶりのことです。入賞作品は、障がいをもっているゆえの不便さや社会への提言などが書かれ、読み手は、気づきや反省すべきことをあらためて考えさせられました。ご自分の障がいだけでなく、身近にいる人の障がいに触れたり、ボランティア活動を通して係わった経験など、とても読みごたえがある作品ばかりでした。

今年も、入賞した作品を作品集として掲載いたしました。1人でも多くの方にご覧いただけることを願っております。

最後に、この作品展にご指導、ご協力くださいました関係機関の方々、ご応募いただきました学校の先生方、また、日頃から当協会の事業をご支援くださっている皆様にあらためてこころより感謝申しあげごあいさつとさせていただきます。

令和7年2月

公益財団法人 千葉県肢体不自由児協会

理事長 白 井 正 一

作文入賞者

千葉県知事賞

荒 雪兎（柏市立柏第七小学校 3年）

題名

にいに、はっばい、だいきー

千葉県教育委員会教育長賞

柴田 結希（君津市立周西中学校 3年）

「障がい者」という言葉を考える

千葉市教育委員会教育長賞

青柳 圭祐（千葉県立桜が丘特別支援学校 高等部2年）

パラスポーツを始めて感じたこと

毎日新聞社 千葉支局長賞

高橋 ほのか（千葉県立桜が丘特別支援学校 高等部2年）

公共交通機関の壁

千葉日報社社長賞

西田 将瑛（千葉県立桜が丘特別支援学校 高等部1年）

僕の十年間の変化

NHK 千葉放送局局長賞

竹川 真園（千葉県立桜が丘特別支援学校 高等部1年）

将来の夢

千葉県小学校長会会長賞

内海 漣（千葉市立千城台東小学校 3年）

わたしの毎日

千葉県中学校長会会長賞

川西 結仁（松戸市立第五中学校 1年）

視野を広げてくれたボランティア体験

千葉県特別支援教育研究連盟理事長賞

土本 ゆい（松戸市立旭町中学校 2年）

地域の温かさ

千葉県肢体不自由児協会理事長賞

田野 日向葵（千葉市立千城台東小学校 6年）

障害者はずるい？

湯浅 ふたば（習志野市立第五中学校 1年）

ユニバーサルデザインから得たこと

総評

毎日新聞社千葉支局長

伊藤 一郎

障がいのある人も、ない人もお互いを理解し、心身障がい児者の福祉の向上を目的とした作文を募集する「手をつなぐ作品展」は今回、72回目を迎えました。昨年に続いて審査に参加させていただき、今年も心に響く応募作品に出会いました。

小学3年の児童さんは、「りょういく」に行っている4歳の弟のことを書きました。「いに、はっぱい、だいつきー」という弟の言葉からは、兄を慕う様子が浮かんできます。兄は弟の豊かな想像力や優しさを具体的なエピソードで示し、作文を読んで側も弟の感受性に驚かされます。兄が見つけ出すのは、弟の長所ばかりです。とつても温かい兄弟愛に感銘を受けました。

中学2年の生徒さんは、車いす生活をする中で見知らぬ人から「お手伝いしましょうか」と申し出られたエピソードから作文をスタートさせました。初めての経験で戸惑い、断ってしまったとしつつ、「その行動と気持ちは大きな嬉しさを覚えるものだった」と明かします。人々の協力やバリアフリー化で公共交通機関が利用しやすくなったと受け止めながらも、まだ当事

者目線から十分でない点を指摘します。それは「バス停留所のスペースが狭く、スロープ板をかけてもらえない場所がある」「駅の多目的トイレが男性トイレまでの通路に設置され、女性が使えない」「車いす利用者は視線が低いため、駅構内やホームでの歩きスマホに危険を感じる」という点。いずれもとても重要な視点であり、こうした課題を速やかに解決しなければなりません。

高校3年の生徒さんは、障がいの兄と共に映画館を訪れ、チケット購入のタッチパネルに「障がいの者」ではなく「ハンディキャップ」と書かれていることに混乱したエピソードから、「障がいの者」という言葉を考えました。「障がいの者」は社会に浸透しているが、「ハンディキャップ」はしておらず、「軽やかな表記は、返って聞きなれない、わかりづらい表記」と感じます。また、「障がいの者」が差別的な用語として使われることがあるとし、「多様な立場や主張の違いに気づくことから、本当の理解が始まる」として現状を変えたいという強い思いを示してくれました。

作文を書くことは、国語力、伝達力、思考力を身につける王様です。これからも思ったこと、感じたことを表現することに挑戦し続けてほしいと思います。



令和6年12月5日(木)
社会福祉センター会議室にて審査会開催



令和6年度
「手足の不自由な子どもを育てる運動」募金頒布品
愛と友情の絵はがき・チーバくんクリアファイル

作文入選作品

千葉県知事賞

にいに、はっばい、だいつきー

柏市立柏第七小学校

三年 荒

雪 兎

「にいに、はっばい、だいつきー。」

ぼくは、弟からこの言葉を言われるととってもうれしです。「はっばい」の意味は「いっばい」、「だいつきー」の意味は「だいつき」です。ぼくの弟は、もんちゃんといえます。もんちゃん、もうすぐ四才になる男の子です。おしゃべりがちよつと下手で、りょういくに行つていきます。りょういくでは、もんちゃんの大すきなねん土やシールはりをやっていて、もんちゃんはとっても楽しそうです。

もんちゃんは、そうぞう力があります。この前、もんちゃんが道ろのひびをずっとしずかに見ていました。ぼくが、

「どうしたの？」

と聞きました。すると、もんちゃんが、「ガオー、いた。」

と、言いました。ぼくが、

「どうしてるの？」

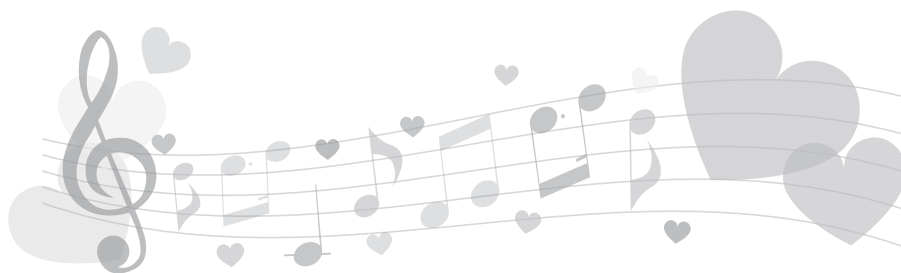
と、聞きました。するともんちゃんはきょうりゅうのまねをして、道ろをドンドンとふんでいました。もんちゃんは、道ろのひびをきょうりゅうの歩いたあとだと思っているみたいです。そんな風に考えるもんちゃんは、とってもかわいいし、おもしろいと思いました。

べつの日にもんちゃんが線むすびのドリルをやっていました。もんちゃんのドリルを見ると、線が重ならないように書いてあつてびつくりしました。丸つけをするお母さんが、「線の上に線を書いていいのよ。」

と、言いました。すると、もんちゃんが、「いたい、いたい。ぶつぶー。」

と、言いました。もんちゃんは、線の上に線を書く、線をきずつけると思っているそうです。ぼくは、もんちゃんはやさしさのかたまりだと思えます。

もんちゃんは、やさしくて、かわいくて、そうぞう力がある、自まんの弟です。だけど、うち園や外だと、もんちゃんのすてきなところがつたわりにくいです。もんちゃんは、ゆつくりゆつくり成長しています。もんちゃんももんちゃんらしく大きくなれるように、まわりの人にもんちゃんを知ってほしいです。もんちゃんのみわりのがやさしさでいっばいになるように、ぼくが守りたいです。



千葉県教育委員会教育長賞

「障がい者」という言葉を考える

君津市立周西中学校

三年 柴田結希

兄と二人で映画館に行った時のことだ。チケットを買う際に、これまで兄は、療育手帳を提示してから購入していた。最近では、タッチパネルを見ながら、大人・小中学生等の選択肢を操作していく。しかし、いくら見ても「障がい者」という表記が見当たらない。唯一、それらしき項目は「ハンディキャップ」。兄と私は混乱した。スタッフの方に訊こうとしても、なんと伝えればいいのかわからず、結局スマホで検索をして、「ハンディキャップ」が「障がい者」を意味するものとわかり、どうにかチケットを手に入れることができた。

「障がい」と「ハンディキャップ」。たったこれだけの違いに、障がい者自身は大混乱してしまう。いつ、どのようにして、なぜ、置き換わったのだろうか。障がい者自身が知らないところで、どんな動きがあるのだろうか。そして、どうすれば「健常者」と「障がい者」が、共に生きやすくなるのだろうか。それを考えてみることにした。

まず、「障がい者」の「がい」という言葉に

マイナスイメージがあるという点だ。一般的には、障害物競争の「障害」と書くことが多い。確かに「害」という漢字には、「害悪」「公害」等の負のイメージが付きまとう。しかも「障り」があつて害をなす者」と表記されているのだから、考えてみれば失礼な話だ。

しかし、その言葉に対して、兄をはじめとする障がいを持つ方々は、ほとんど気にしたことがない。我が家でも話題にすらならない。これまで、日本の社会で「障碍」を「障害」とし、「障がい」と表記するように動いたのは、障がいを持つ方々への配慮だったのだろう。しかしさらなる「ハンディキャップ」という軽やかな表記は、返って聞きなれない、わかりづらい表記としか感じられない。

二つ目に、「障がい者」という言葉が、差別用語として、相手を馬鹿にしたり罵倒したりするような使われ方をしている点だ。障がいを持つている方々は、あくまでも個人差はあるが、やりにくい、できないことが健常の方よりも多く、そのため能力が低いと思われることが多々ある。

しかし、その障がいは、さぼったりずるをしたりしていることが原因ではない。また、指摘されたからと言って改善できるわけでもない。生まれながらの障がいを、自分の個性として生きることを選択した本人と、家族の人生そのものだと思ふのだ。

三つ目に、差別を問題視する気持ちだが、一人歩きしている点だ。うわさ話やネットの情報など、事実と言われていることのある一面に、「少し聞いただけの人」が本気で腹を立てている。そして、暴力的な言葉で悪を懲らしめようとする。

しかし、懲らしめる前に、本当に困っているのか、助けるべきなのかをよく考えることが大切だ。「障がい者は困っている。だから皆で助け合おう。」この考えは素晴らしい。だが、「障がい者」を「ハンディキャップ」に変えたことくらいで、差別の意識の現状は、そう簡単には変わらないだろう。

では、どうしたらよいのだろうか。まずは、ありきたりかもしれないが、しっかりと話し合うことだと思ふ。様々な立場の方々のお話を聞き、自分の考えを率直に伝える。その過程では、意見の相違も当然あるだろうし、意見の決闘のような場面もあるかもしれない。けれど、無関心や、わかったふりのすれ違いよりもずっといい。感情的な取っ組み合いのほうが、絶対に意味があると思ふのだ。

そんな、多様な立場や主張の違いに気づくことから、本当の理解が始まるのだ。まだまだ時間がかかるだろう。だが大切なのは、話すことによつて歩幅を合わせ、共に歩むことではないだろうか。私も、兄と友達と多くの方と、ぶつかり合いながら歩んでいきたい。

千葉県教育委員会教育長賞

パラスポーツを始めて感じたこと

千葉県立桜が丘特別支援学校

高等部 二年 青 柳 圭 祐

僕は生まれつき身体の障害を持っています。今では、日常的に車椅子を使って生活をしています。

僕は、体を動かすことが好きです。小学校までは普通校に通っていて、小学校卒業までは歩くことが出来たので、休み時間や休日にはクラスメイトと一緒にドッジボールや鬼ごっこをしていました。そして中学校からは車椅子を使い始めることになったので、特別支援学校に入学しました。新型コロナウイルスが流行して遊ぶことはできませんでしたが、コロナが落ち着いて、小学校の頃に遊んでいた友達とも遊ぶ機会がありました。

しかし、前と同じようにはいかず鬼ごっこをしていても車椅子ではスピードを出して走れないし、すぐに追いつかれるが増え、徐々に外で友達と体を動かして遊ぶことが少なくなっていました。車椅子だとスポーツをすることは次第に難しくなっていました。中学部に入学し、陸上部があることを知り、入部して車椅子

陸上を始めました。最初は慣れない競技用の車椅子でスピードがあまり出せませんでした。練習していく中で慣れてくるにつれて風を感じられるようになり、最近では県のスポーツ大会まで出るようになりました。それと同時に「他の競技も挑戦してみたい」と思うことが多くなりました。

ちょうどその時、東京2020パラリンピックの車椅子バスケットボールの日本の試合をテレビでやっていて見る機会がありました。陸上とは違う迫力やチームの中で様々な障害を持つ選手がプレイしているのを見て、「このスポーツをやってみよう」と思うようになりました。

しかしルール・競技車や、どこでやっているのかもわからなかったため、その時はあきらめざるをえませんでした。

高等部に入部して、その時の高3の先輩から「車椅子バスケットボール体験会があるけど行かない？」と誘っていただきました。参加してみると競技専用の車椅子に乗りました。「車椅子の形が違うが、車椅子というのは同じだから漕ぐのもいつもの感じだろう」と思っていました。しかし漕ぎ始めるといつもよりも軽い力で前に進んだり、回転するのも速かったりして、その中でも一番驚いたのは、接触してもいいということでした。思っていた以上に激しい

スポーツだということの他に「日常車よりもスピードも出るし、これなら鬼ごっこやドッジボールも小学生の時のようにみんなと一緒に遊ぶことができる」と思いました。同時にパラスポーツをしていると自分が障害者だということを忘れることが出来たり、そこで色々な友達が出来たりといった様々な経験をすることができました。

そして、パラスポーツを始めて、小学生の時よりも、より体を動かすことが好きになることができました。最近では小学校時代の友達とパラスポーツを一緒にしたり、車椅子を使って遊んだりするなど楽しい時間を過ごす事ができています。

これからも車椅子バスケットボールなどの様々なスポーツをしていきたいです。そして、今よりもスポーツをすることが好きになれるようになっていきたいです。



公共交通機関の壁

千葉県立桜が丘特別支援学校

高等部 二年 高橋 ほのか

「何かお手伝いしましょうか。」見知らぬ人にそう聞かれ、少し驚いた。

私は、生まれつき足が不自由で車椅子生活をしている。いつものように公共交通機関を利用してしていた時、一人の女性が私に声をかけてくれた。初めての経験で戸惑ってしまった。しかし、その場では感謝を伝えて断ってしまった。しかし、その行動と気持ちは大きな嬉しさを感じるものだった。このように、公共交通機関は人々の協力やバリアフリー化が進み、私を含めハンデを持っている方々にとって利用しやすくなっていると感じている。一方、当事者目線から見れば設備が十分に整っていないなかったり、もう少し人々の協力が必要だったりする部分がある。

まずは、バス停留所についてだ。ほとんどが車椅子で乗るためのスロープ板がかけられるスペースがあるが、場所によって歩行者通路程の狭さでスロープ板をかけてもらえない場所がある。そのため、乗り降りしたい場所で利用できないという問題がある。また、スロープ板をか

けてもらえたとしても、車椅子スペースに乗るには一番先に乗る必要がある。そのため、他の利用客が列になってしまった場合でも列に並ぶことができない。これらのことから、車椅子を利用している人が待つことができるスペースがあると安心して利用できるだけでなく、運転手の方に気づいて乗せてもらいやすくなると思う。

次に、駅の多目的トイレについてだ。多目的トイレが男性トイレまでの通路に設置されているところが多いこと、ゴミが多く置かれていることがある。これらは駅だけのことではないが、私は女性が男性トイレ通路を通るのは、視線が気になり少し抵抗感があると思うし、私自身も男の人が出てきたタイミングで男性トイレの方向に向かったことがある。その時はおそらく、車椅子に乗っていたから気になっただけだとは思うが、目線が気になった。確かに女性トイレ側のみを設置することは無理がある。しかし、私のように車椅子でなく目に見えない事情を抱えた方のためにも出来れば対策してほしい。ゴミの多さについては、実際に空き缶や食べ物のゴミが置かれていたことがあり、多目的トイレを利用する私としてはとても不快な思いになった。たとえばこのどんなトイレでも、みんながルールを守って使うことが大切だと感じた。

最後に、駅構内やホームで歩きスマホや前を

見ずに歩いている人がいることだ。私も周りをよく見るようにしているが、とても危険で怖い。特に、車椅子に座っていると目線が通常よりも低いため認識されづらい。そのため、急いでいても走らず、周りに注意して行動してほしい。以上のことが公共交通機関を利用した際に感じたことだ。車椅子で生活していると自分で自分を特別視してしまうことがある。しかし、他者に求める分自分も気を付けて生活していきたいし、しようと思う。正直、車椅子で大変な面もあるが他者の考えを知ることができ、私だから感じることもできることもある。私は将来、自分の目線からハンデを持った人や同じ境遇の人が住みやすくて、過ごしやすい環境をつくる仕事に携わってみたい。そして、冒頭の方のような「思いやり」を持った人が増え、理解がもっと深まることを願っている。



僕の十年間の変化

千葉県立桜が丘特別支援学校

高等部 一年 西 田 将 瑛

僕は障がいをもっており、小学校四年生頃から車イスを使って生活している。小学校入学から現在までの中で、不便だと感じることもあったが、様々な気持ちの変化があった。そんな、約十年間の変化をここに記したいと思う。

小学校は地元の小学校に通っていた。低学年の頃は、少し歩きづらさを感じはじめていたため、階段の上り下りや長距離の移動などが大変になった。しかし、それほど不便さは感じていなかったため、車イスは使っていなかった。

中学年からは車イスも使いはじめたため、支援員さんに付いてもらいながら、学校生活を送っていた。低学年の頃と比べて、不便を感じる事が多くなっていた。特に、階段の上り下りは抱えてもらわなくてはいけなかったり、傾斜や段差が多くて移動が制限されてしまったりすることが不便だった。小学校四年生頃からは、先生方から、僕ができる事を生かした、運動会の五十メートル走や百メートル走の実況や行事の司会などを任されるようになった。

高学年でも移動面で不便を感じていたが、様々な仕事を任されて、だんだんと僕も積極的に仕事をやるようになっていった。六年生の運動会の太鼓の演奏がとても記憶に残っている。なぜなら、先生方が工夫をしてくださり、友達と一緒に演奏することができたからだ。演奏はとても疲れたが、最後までやる事が出来て嬉しかった。

小学校の六年間は、階段の上り下りは抱えてもらわないと出来なかつたり、傾斜や段差がある所は通りづらかつたりと自由に移動が出来ないことが不便だった。しかし、同じ学年の友達は障がいの有無に関係なく接してくれたため、すごく楽しかった。また、友達と全く同じ事は出来なかつたけれど、両親や先生方が別の形で友達と一緒に出来るよう工夫して、様々な仕事を任せてもらえて、嬉しかった。

中学校は、支援学校に入学した。小学校の友達を離れてしまうことは寂しかったが、支援学校の見学に行った時に、廊下の広さやエレベーターがあること驚いた。また、小学校の時に通級で支援学校の先生と関わって、障がいについて理解していて、サポートしてもらえたため、この学校なら過ごしやすかと思ひ入学した。支援学校では、今まで出来なかつた事が支援をしてもらいながらやる事が出来た。そこで、行事の司会やグループ活動のリーダー、生

徒会活動に挑戦し、挑戦することの大切さを学んだ。また、自分と同じ障がいを持った友達と関わって、全員が色々な事を頑張っている事を知った。三年間で、自分の障がいについて理解を深める事が出来て、障がいに対する考え方が今までより前向きになった。

同じ支援学校の高等部に入学して、進路の事をよく考えるようになった。学校での授業で、進路について学んで、様々な進路があることが分かり、どの方向に進むにしても大変だなと感じた。そして、自分の事を理解することがとても大切だと思った。

最後に、約十年間の変化を振り返ってみて、運動会の実況や行事の司会、生徒会活動など様々な事に挑戦して、自分は成長し続けていることが分かった。挑戦することで様々な学びがあったから、これからも続けていきたい。将来、先を見据えて計画を立てて行動出来るようになるため、今は登校したら授業変更などが書かれた掲示板を見たり、何かをやる時はそれをやるためには何をしなければいけないかを考えたりするようにしている。これからも自分をより良くできるよう努力していきたい。

NHK千葉放送局局長賞

将来の夢

千葉県立桜が丘特別支援学校

高等部 一年 竹川真園

をこの三年間で身に付けて、自分が一番なりたい将来の夢、看護師になれるように努力していきます。

二つ目は、俳優です。この夢は私が小学五年生の時から習い始めた合唱団がきっかけでもち始めました。その習い事に入団したことで、音楽をすることの楽しさを実感できました。特に、歌を歌うことやミュージカルの世界に入り、人を演じることなどの楽しさをとても多く

うと思った原点です。私は俳優になったら、今までお世話になった方々に演技の力や表現する力で恩返しをしたいです。なぜなら、家族は私が小さい頃から音楽に関わることを沢山させてくれたり、友人はどんな時でも私の夢を応援し続けてくれたりしたからです。

改めて、私の将来の夢は看護師と俳優です。私がこの二つの職業に対して必要と思うことは、自信を持つことです。この先は、何事にも自信を持ち、患者に寄りそい元気を与えたり、演技の力や音楽の力で人々を魅了できる人になりたいです。

私の将来の夢は、二つあります。一つ目は、看護師です。この夢は私が初めてもった夢でもあります。私は人生の中で十三回入院して、その内の小四から中三の期間は定期的に入院をしていました。その中で一番関わりがあったのは、看護師の方々でした。優しい看護師さんたちの元で入院していたおかげで、私は看護師に関する様々な話を沢山聞くことができました。だから、より看護師になりたいという気持ちが強まっていきました。私が看護師になったら、一番最初にしたことは、お世話になった医療従事者のみなさん、家族友人への感謝です。なぜなら、特に深く関わりをもち、その分沢山助けられたからです。私が入院していた時に一番感じていたことは、看護師さんの多忙さです。入院中の健康管理や患者に寄り添うことなど、毎日本当に忙しそうでした。また、緊急時に素早く対応できる臨機応変さもあって本当にすごいなと感じました。時間で素早く動き、緊急時にはいつでも対応できるような力と、どんな時でも挫けず折れない強い精神力、忍耐力、体力

感じることもできました。私が合唱団に入団して一番に感じたことは、音楽をすることへの幸福感です。私は入団する前から音楽は好きでしたが、入団したらもう私の人生には必要不可欠なものになっていました。そう感じることできたのも先生方、団員、家族、友人のおかげです。ドラマや映画を観察して一番に感じたことは、表現することや演じることの素晴らしさです。元々、そのような事をするのに苦手意識があった私でも一度演技の世界に入り込んだら以前より苦手意識がなくなりました。俳優になるうと思っただけのきっかけはドラマや映画などの影響です。テレビや舞台に出演しているプロの俳優さんたちを観察していると、演技力や表現力が豊富だから俳優という夢を持ち始めた頃よりもずっと気持ちが強くなっていき、より演技の世界が好きになりました。だから、合唱団に入団しました。プロの人たちがいる演技の世界に惹かれたことが私が俳優に将来になる



千葉県小学校校長会会長賞

わたしの毎日

千葉市立千城台東小学校

三年 内海 滯

わたしは生まれつき、体・左うで・左足がうごかしにくく、おしゃべりもにが手でうまく人に話がつたわらなくてこまっています。わたしのしょうらいのゆめはアイスやさんなので、左うでや左手がつかえないとこまっています。

わたしは毎日3回手や足のストレッチをしています。自分でできることがふえるようにやっています。できないことは学校ではお友達がたすけてくれることもあって、とてもうれしいです。

夏休みにわたしのおじいちゃんとわたしの左手のかわりに物をおさえる道ぐを

作りました。ゼリーやペットボトルのフタをあけられなくてかなしかったので、その道ぐであけられてうれしいです。

わたしみたいなふ自由な体の人みんな、こまっていることはちがいます。その人に合った手助けがひつようだと思えます。わたしはみんなといっしょのような左手もうごくしおしゃべりもじょうずになりたいので、これからストレッチをがんばったりおしゃべりのれんしゅうをしていこうと思います。



千葉県中学校長会会長賞

視野を広げてくれたボランティア体験

松戸市立第五中学校

一年 川 西 結 仁

僕は夏休みの前に、「レッツ体験！」と書いてあるチラシをもらいました。それはボランティア参加募集のチラシで、夏祭りの手伝いやゴミ拾い、子ども食堂の手伝いなど楽しそうなお話がたくさん書かれていました。僕は夏休みも長いし、何かやってみようと思い、軽い気持ちで参加を決めました。

まずは松戸市民活動サポートセンターに行き、それぞれのボランティアの目的と注意事項の説明を受け、ますますやってみようという気持ちが高まりました。次にあったマッチングの会では、それぞれ団体の方から活動の目的や実際の活動内容などを説明いただきました。その後、参加させていただく団体や体験する日時を決めました。僕は、料理を作ることが好きなので、子ども食堂の手伝いがしたかったです。しかし、日程が重なり、部活動の大会や練習などと予定が合わなかったため、悩んでいました。ふと、小さい頃に児童館で先生や学生の方と遊んでいたことを思い出しました。そこ

で、子育て広場や一時預かりをしている「ほっとるーむ」という所に二日間行くことにしました。

体験一日目、うまくできるだろうかと少し不安に思いながら、「ほっとるーむ」に着くと、赤ちゃん広場というイベントをしていました。そこには、赤ちゃん連れのお母さんたちがたくさんいました。僕がドキドキしながら準備をしていると、スタッフの方に赤ちゃん広場を手伝うようお願いされました。そこで、僕が緊張して何もできずにいると、スタッフの方が僕のことを紹介してくれて、赤ちゃんを抱っこさせてもらえることになりました。ところが、赤ちゃんをヒザの上に乗せると、自分のお母さんでないことに気付いて泣き出してしまいました。僕は、お母さんになくさめてもらっている赤ちゃんを見て申し訳ない気持ちになりました。その後、ハイハイしている子どもと遊んだり、お母さんの話を聞いたりして、一日が何とか終わりました。たった三時間だったけれど、赤ちゃんにケガをさせないように心がけていたので、すごく疲れました。

二日目、今日はどんな子どもたちがいるのかなど、ワクワクしながら向かいました。この日は、一時預かりを手伝うことになりました。僕がその部屋に入ると、一人の男の子に「一緒にパズルをしよう」と誘われて、パズルを始めま

した。僕が男の子に「これはどこに置くのかな？」と聞くと、「ここだよ」と元気に答えてくれて、ピースをどんどんはめていき、パズルが完成しました。その後、つまらなそうにしている子どもを誘って、ブロックで遊ぶことになりました。僕がロボットを作ると、その子はとても喜んでニコニコしながら遊び始めました。作って良かったと思いました。その後、スタッフの方が「いつもはじつとしていて、あまり遊ばない子だけ君がいたから、今日は楽しく遊んでいたよ」とほめてくれたので、とてもうれしかったです。

このボランティアを通して、僕は一日たった三時間でこんなに疲れたのに、一日中ずっと子どもと接している親はすごいなあと思いました。ボランティア終了後、「冬も来てね」と言われ、僕でも少し役に立てたのかなと思いました。また次回も絶対に参加したいです。

ボランティア体験は、人の役に立てる喜びと、いつもの日常と違う空間を見ることで、視野を広げる機会を与えてくれました。

千葉県特別支援教育研究連盟理事長賞

地域の温かさ

松戸市立旭町中学校

二年 土 本 ゆ い

今年の夏、私は夏休みの実地体験学習で、地域ボランティアに参加しました。訪問先は特別養護老人ホームと保育園のどちらかを訪問するのですが、私の周りには私と歳の離れた年下の親戚がおらず、幼児との接し方が分からないので、特別養護老人ホームを選択しました。私の、近所に祖母と曾祖母が住んでおり、年配の方が多い老人ホームはとても近い存在に感じました。

ボランティアの活動は、二時間の中で利用者と関わり、施設内の掃除、手すりなどの消毒を行いました。慣れない環境での活動は、しばらく緊張が解れませんでした。施設内を周りながら、掃除をしていた私に、すれ違うおばあさんが、

「ありがとうございます。」

と声をかけてくださいました。その一言から自分が今行っていることは他人に貢献できていることを実感し、やりがいを感じる事ができました。何気なくくれたお礼の言葉には、おばあ

さんの和やかな気持ちを感じられました。

「ボランティア活動で一番印象に残っていることは何ですか？」と聞かれたとき、私はおばあさんが言った

「ここにいて私たちはいつも幸せです。」

という率直な気持ちと、嬉しそうに介護士の方の話をするおばあさんが一番に思い浮かびます。おばあさんは、介護士の方のおかげで毎日が幸せだということを教えてくださいました。私はおばあさんが言ったことに対し、共感すると同時に、そこには、介護士の方の苦労や努力も感じられました。私はあの日たくさんの歩み寄りを見たことを思い出しました。介護士の方は、常に明るく笑顔でお年寄りの方と接し、一人であるお年寄りの方には、自分から声をかけ、信頼関係を築いていました。その姿を見て、私は、介護士の方の意識や心構えに感銘を受けました。介護職は、やりがいを感じ、楽しさを感じることもあると思いますが、それ以上に、辛いことや大変なことの方が多くあると思います。身内の家族の介護だけでも、親が苦労し、悩んでいる姿をよく目にしています。身内であれば、本音を言い合えたり、頼れる存在もいます。ですが、介護士の方は、多くのお年寄りの方の介護をしています。時には、意見がすれ違うこともあるかもしれません。ですが、介護士の方は、相手を否定せず、思いやりの姿勢で、

寄り添いを意識した対応を常に心がけ、苦労している様子や疲れている様子は見せませんでした。やりがいを持ち、仕事に励む介護士の方は、仕事に誇りを持ち、心から介護に向き合っているのだと思いました。

今年の夏、地域ボランティアに参加して良かったなと心から思いました。何より思うことができたのは、介護士の方々と、施設にいるお年寄りの方々のおかげです。自然と笑顔になり、和やかな環境で貢献できたことがとても嬉しいのです。この活動を通して、働くことの厳しさ、やりがい、誇りを感じ、他者と関わることで、出会いを増やし、より豊かな人間関係を築くことができました。施設から帰る際に、お年寄りの方が、

「また来てくださいね。」

と言って手を握ってくださいました。その手の温もりから、地域の温かさを感じた気がしました。



千葉県肢体不自由児協会理事長賞

障害者はずるい？

千葉市立千城台東小学校

六年 田野 日向葵

私は今まで、「障害者だって大変なんだ。だから、こんなことを思っではいけない」と思いながらも、正直、障害者のことを羨ましく思っていました。なぜなら、いつでも目立ち、気にかけてもらえるからです。

どんなことでも、普通の人（大多数の人）と違っている人がいれば、気になってしまい、つい見てしまうのは人間の特徴です。誰もが一度は障害者の方を見かけたことがあるでしょう。そしてその時、ついずっと見てしまったり、目で追ってしまったことはありませんか。私もよくやっけてしまいます。そのように、他の人によく見てもえ、目立っている障害者は、自分の存在をより多くの人に知ってもらえるため、うれしいと思っていました。

そんな私の考えを変えたのは、ある塾の宿題でした。塾で「障害者とともに暮らす社会について」という作文を書く宿題が出ました。どのようなことを書くかあまり思いつかなかつたため、どのような障害があるのか、障害者はどのような思いをしているのか、ということ調べ

てみることにしました。

調べたことで、障害者について色々なことが分かりましたが、その中でも、二つ印象に残ったことがあります。一つ目は、「外見でわかるものだけが障害ではなく、外見ではわからないために理解されずに苦しんでいる障害もある」という、内閣府の資料にあった障害のある当事者の方々からのメッセージです。確かに、私が外に出て「あの人は障害者だな」と思うのは、白杖を持っていて視覚障害者の方や車椅子に乗っている肢体不自由者などの身体障害者です。しかし、知的障害者や精神障害者など、あまり見かけないように思える障害者も、たくさんいるそうです。おそらく、白杖や車椅子など、障害者だとわかるようなものを持っていないからだと思いますが、そういう人たちが障害を理解されずに苦しんでいるのであれば、私たちはそのような障害もしつかりと理解し、困っているときに助けてあげたりすることが大切だと思えました。

二つ目は、「障害があるために特別な目で見られたり、同情されたり、軽蔑されるのは耐え難い」ということです。最初でも書きましたが、私はみんなに見てもらえるのがうれしいと思っていたので、驚きました。どうしてなのか分かりませんでした。

そこで、実際に障害者の立場になって考えてみることにしました。まずは視覚障害者です。

アイマスクをして、棒（白杖の代わり）を持って家の中を歩いてみることにしました。実際にやってみると、ぶつかってしまいかもしれないとこわくなり、歩幅五センチメートルほどになつてしまいました。いつもなら二十秒で歩ける一階にあるリビングから二階にある寝室までは、なんと四分もかかりました。階段は二歳児のようなのぼりかたになつてしまつたし、ドアかと思つたら壁で、「ここはどこ？」となつたりもしました。次に肢体不自由者の体験をしました。本当は車椅子が良かったのですが、家にはないので、右手が不自由な人の体験をすることにしました。利き手が使えないと、文字もうまく書けないし、箸もうまく使えないなど、色々な場面で大変なことがありました。

この体験から、健康の目や身体があることは、当たり前だと思っていたけれど、当たり前じゃないということを実感しました。そして、「特別な目で見られるのは耐え難い」ということの意味もわかったような気がします。もしかしたら違うかもしれませんが、私だつたら、自分がかうまくできないでオロオロしているところを他の人に見られたくない、とか、弱みを握られていようと嫌だ、と思います。

「障害者はずるくない」
そう、強く思いました。

千葉県肢体不自由児協会理事長賞

ユニバーサルデザインから得たこと

習志野市立第五中学校

一年 湯 浅 ふたば

「この自動販売機いつもと違う。」とあるショッピングセンターでの出来事でした。以前、よく利用しているショッピングモールに私がよく見る自動販売機とは見た目が少し異なったものがありました。その自動販売機は、高さ私の身長よりも低いものでした。その時は、小さな子どものためか、と思いました。帰った後、今日の出来事が気になり、自動販売機について少し調べてみました。すると、今日見かけた物は「ユニバーサル自動販売機」というものでした。ユニバーサルデザイン自体はよく耳にする言葉ですが、自動販売機にまで使われているということは初めて知りました。ユニバーサルデザインとはすべての人にとって使いやすく、できるだけ多くの人を利用できるようにデザインされている物だという事が分かりました。それらをふまえて、振り返ってみると、以前見た自動販売機は車いすに乗っていても見えそうなデザインだったのだと思いました。

この時に、ユニバーサルデザインは他者への

理解につながってくると考えました。なぜなら、困っている人に目を向けなければ、このようなデザインが生まれなかつたからです。この様に「理解する。」というのは言葉では簡単に言えても、実際に実行するのはとても難しいと思いました。私なりに考えた理解とは、まずは様々な視点から見えていくことが大切なのではないかと思いました。自分と相手のどこが違うのか、相手の視点になって考えないとわからないことがたくさんあるのではないのでしょうか。このように自分のことだけでなく、

様々な人の立ち場になって物事を考えることで、自分にとっては不自由なく生活できることも、他の人にとっては使いづらく改善してほしい点が出てくるのだと思いました。ユニバーサルデザインに限らず、私たちの生活の中にもこの受けとり方は重要なのではないかという考えに変わっていききました。つい最近までは、「他人を思いやる気持ちが大変だ。」ということばかり頭にありました。この経験をふまえて私は、人を思いやるためにはそもそも視点を変えることや、相手の立ち場になって考えることが重要なのではないかと思うようになりました。

そこから私たちの生活の中でできることはなにかを考えてみました。この世界には様々な個性を持った人がいると常々思っています。やはりその中では考え方の違いから、偏見や差別が

起こったりすることがあると思います。なぜそのようなことが起こるかを考えた時に、自分の価値観だけで考え、自分とは違ったそれぞれの個性を認めきれないからだと思ったのです。ですが、考え方や、視点を変えたり、それぞれの個性を認め、受け入れることで、お互いを理解し合えると思えました。相手のことを知ろうとしていくことが大切だと思いました。そうすることで、お互いを尊重し合える良い関係を築いていけるのだと思います。

みんな同じではない、同じじゃなくていい。一人一人の個性を知り、尊重していくことが大切だと思えました。周りの人達みんながお互いに気持ちよく過ごすためにも、たくさん個性を認め合って違う意見を持った人がいるということをお忘れずに生活していきたいと強く思いました。



～手をつなぐ作品展～

- 主 催 公益財団法人千葉県肢体不自由児協会
千葉県 千葉県教育委員会
千葉市教育委員会 毎日新聞社千葉支局
- 後 援 千葉日報社 NHK千葉放送局
千葉県小学校長会 千葉県中学校長会
千葉県高等学校長協会
千葉県特別支援教育研究連盟

令和6年度応募作品数

作文 14校 42点



令和6年度

手をつなぐ作品展

第72回 入賞作品集

発行 令和7年2月

編集 公益財団法人 千葉県肢体不自由児協会
〒260-0026 千葉市中央区千葉港4-5
千葉県社会福祉センター内
TEL 043(245)1732
FAX 043(245)1742

印刷・製本 三陽メディア株式会社